

## 原風景から見た「人が所有している空間」の考察

—ボルノウ空間論に基づく住環境教育の基礎的研究—

## CONSIDERATIONS ABOUT “RAUM, DEN MAN HAT” BASED ON PRIMARY SCENES

A basic study of dwelling environmental education  
grounded on the theory of space by O.F. Bollnow

後藤 さゆり\*, 在塚 礼子\*\*

Sayuri GOTO and Reiko ARIZUKA

This study aims at accounting for validity of the theory of space by O.F. Bollnow for dwelling environmental education, and trial study on making clear of the characteristic of “Raum, den man hat” Bollnow said by considerations about the representation of Primary Scenes.

According to the theory of space by Bollnow, it is principal understanding of space on the true meaning to dwell that man get “Geborgenheit” in “Raum, den man hat”.

As a result, Primary Scenes are valid for realizing “Raum, den man hat” through having unity with man, and “Geborgenheit”.

**Keywords :** dwelling environmental education, O.F. Bollnow, theory of space, Primary Scenes

住環境教育、O.F.ボルノウ、空間論、原風景

## 1 研究の目的

本稿の目的は、教育人間学の見地から O.F.ボルノウの空間論が、住環境教育において有効であることを明らかにし、その試論としてボルノウのいう「人間が所有している空間」の特徴を、原風景を手がかりに明らかにすることである。ボルノウは著書『人間と空間』<sup>1</sup>で、人間と空間との関係を「体験されている空間」(der erlebte Raum) という哲学的人間学の視点から論じ、建築学に大きな影響を与えた。このような空間に対する見方は、ボルノウの研究の中心が教育人間学であることと関係が深く、彼の空間論は人間学的に重要な教育的課題の提示という意味を持っているのである<sup>2</sup>。この点に着目して、本稿ではボルノウの空間論の根幹を成している「人間の生の空間性」(Die Räumlichkeit des menschlichen Lebens)に基づく空間の特徴、およびそれが持つ教育的有効性を明確にする。さらに、本稿では原風景として語られる人間と空間のかかわりから、ボルノウが論じた「人が所有している空間」の具体的な像を問う。

これらの目的は住環境教育の今日的課題とも深くかかわっている。例えば、小澤は欧米の環境教育では「それぞれの文化に基づいて全環境という文脈の中で『生活の質』『人間の幸福』などの基本概念の意味を自ら明確にすること」というベオグレード憲章が根付いており、住環境教育では人間と住環境との関係に対する教育の展開が求

められていることを指摘している<sup>3</sup>。また、延藤はまちづくりなどの参加型学習で得た見地から、「人間性」を含めた学習の必要性を説いている<sup>4</sup>。これは、有用性の概念で体系化された知だけではなく、体験し、参加することによって生成する新たな知の重要性に対する指摘であり、自らが住環境を創造する主体性を育むという視点が存在する。このような課題を踏まえ、ボルノウのいう「人が所有している空間」の意味を考察する。

## 2 住環境教育におけるボルノウの「人が所有している空間」の意義

ボルノウは『人間と空間』において「表象される空間」と区別して「体験されている空間」を論じ、人間の生の空間性の構造を明らかにした。そして、彼はこの間を通して、人間と空間とのかかわりにおける教育的課題は「外部空間」(Außenraum)を人間の主体的努力によって「内部空間」(Innenraum)へと空間を変容させることであると述べている<sup>5</sup>。

## 2-1 「人が所有している空間」—人間の空間性の構造からの規定

ボルノウは人間の生の空間性の構造について「体験されている空間」の探求を通じ、まず「志向的空間」(intentional Raum)の存在を明らかにする。「志向的空間」とはサルトルの「自己を位置づけている」<sup>6</sup>という意味において、人間の距離 (Entfernung) や方向 (Ausrichtung) という空間性に秩序だて

\* 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所  
大学院生・教育修

\*\* 埼玉大学教育学部 教授・工博

Graduate Student, Doctoral Course, The United Graduate School of Education,  
Tokyo Gakugei Univ., M. Edu.

Prof., Faculty of Education, Saitama Univ., Dr. Eng.

られた空間であり、人間が主客二元論の見方で空間を捉えるときに意識されるという特徴をもつ。さらにボルノウは、人間の生の空間性には「志向的空間」を構築するだけでなく、主体である人間と客体である空間が、まさに人間の精神と肉体の関係のように主客未分の状態で意識される空間を成立させる特徴があることを明確にする。この空間がボルノウのいう「人が所有している空間」である。ボルノウによれば、そこでの人間と空間との関係は「志向的空間」概念では有意味に基礎づけられず、人間の「空間の中での在り方の諸形式」<sup>7</sup>が問題となるという。そして、「所有する」という空間性において「はじめて人間の空間性の本来の根底に到達する」<sup>8</sup>と述べている。

## 2-2 「人が所有している空間」の特徴

「人が所有している空間」には2つの特徴がある。それは、彼がメルロ＝ポンティの「受肉」という概念で説明した主客未分の空間という特徴と、“Geborgenheit”の存在である。「受肉」という概念は、健康な状態においては一体化しているように感じられても、健康を害してみれば精神とは別に客体としての肉体を意識するという精神と肉体との関係から表わされた概念である。また、“Geborgenheit”<sup>9</sup>の概念はボルノウが実存哲学でいう被投性の概念を前提としたもので、ボルノウは人間が人間らしく生き生きと生きるためには、空間の中にただ投げ出されているだけではなく、自分を支え安心させてくれる空間が必要であると考えた。なぜなら、人間が投げ出されている空間では、主観と客観が分裂した状態であるのに対し、“Geborgenheit”のある空間では、主客という二元的関係は緩み、志向的な関係も緩和するからである<sup>10</sup>。つまり、ボルノウによればこの様な主客未分の関係は、心から安らぎ、空間と融合し、空間によって包み込むように抱かれる“Geborgenheit”を獲得してはじめて起こりうる関係であり、これにより人間は住むことができるということになる。従って、「人が所有している空間」の具体例として挙げられている「家」(das Haus)は、防壁や外壁で区切って安全確実にする空間を意味しているのではなく、そこに人間の“Geborgenheit”という心的構え(die seelische Verfassung des Menschen)が加わった空間を意味している。

## 2-3 ボルノウ空間論の教育的有効性—住環境教育の2つの課題

ボルノウによれば、人間が住むとは「人が所有している空間」によって「担われ支えられ、空間の中で庇護されている」という関係であり、志向性による関係ではない<sup>11</sup>。しかし、「人が所有している空間」は認識するのが非常に難しいという。なぜなら、「われわれの概念的な認識作用は、主観と客観の分裂をともなった意識の形成をすでに前提としている」<sup>12</sup>からである。このことから、困難さを乗り越えて「人が所有している空間」を意識化することを住環境教育の第一の課題ととらえることができる。本稿はこの課題に取り組む研究として位置づけられる。

また、ボルノウは「人が所有している空間」を“Geborgenheit”のある「内部空間」とも表現している。ボルノウは、この「内部空間」と「外部空間」の分節構造が教育的意味を持つという。“Geborgenheit”は、人間の営み全てにおいて重要な心的構えであり、彼は教育的行為の根幹を成すものとして位置づけている<sup>13</sup>。そして、この“Geborgenheit”のある空間こそが住む行為を主体的なものとし、さらに「内部空間」に留まることなく「外部空間」へと働きかける力を導き出す原動力となるという<sup>14</sup>。つまり、ボルノウの空間論は、「内部空間」において人間は自己の開示の力が増すという教育的効果と、常に“Geborgenheit”を獲得した「内部空間」に留まるのではなく、新たに客体として存在する空間に対して働きかけ、新たな「内部空間」を生成する

という教育論として成立している。この点を、住環境教育の第二の課題として捉える。

## 3 原風景による「人が所有している空間」の分析と考察

### 3-1 「人が所有している空間」を捉える手段としての原風景

ボルノウの空間論から得た住環境教育の第一の課題に取り組むためには、「人が所有している空間」という概念を具体的な像として捉える必要がある。そこで、本稿では「人が所有している空間」の具体的な像を捉える手段として原風景を用いる。

原風景に対する研究は、文化人類学、心理学、地理学など専門の異なる分野で研究されており、統一された学術的定義はない<sup>15</sup>が、建築大辞典では「現前の景観を評価する際に暗黙裏に比較の対象となり、場合によっては評価の態度を規定するように働く規範的風景イメージが、過去の何らかの風景への近似的表象であるとき、これを原風景と呼ぶ」<sup>16</sup>と説明される。建築学に影響を与えた原風景の代表的な先行研究には、奥野<sup>17</sup>、岩田<sup>18</sup>、関根<sup>19</sup>の研究がある。岩田によれば、原風景とは「幼少年代の記憶の中の風景」「忘れがたい風景」「思い出すたびにそこからエナジーが湧きだしてくるような風景」「自分自身の創世記」と説明され、一元世界などの特徴を持つとされる<sup>20</sup>。また、原風景と注意意識に関する先行研究には、仙田<sup>21</sup>、延藤<sup>22</sup>の研究がある。これらの先行研究は原風景として捉えられた住環境を資料とすることにより、「体験されている空間」を注意意識の中に捉える重要性に論じた研究と位置づけられる。また、寺本<sup>23</sup>は原風景調査から知覚空間を捉える実証的研究を、野中<sup>24</sup>は原風景に見られる自然を中心とした環境観の研究を行っており、原風景が住居だけではなく住環境に対する包括的な注意意識を捉えうることを示している。

これらの先行研究をふまえて、「人が所有している空間」の具体的な像を捉える手段として原風景を用いる理由は次の二点である。第一点は、先行研究によって明らかにされた原風景と「人が所有している空間」が、人間と空間とが一元化して捉えられているという本質的特徴において一致していることである。第二点は、原風景が生エネルギーの源泉となるという特徴と「人が所有している空間」によって主体性が獲得されるという特徴は同義であると考えられることである<sup>25</sup>。従って、本調査の目的は、原風景によって「人が所有している空間」を捉えることの妥当性を確認すると共に、原風景の分析を通して「人が所有している空間」の具体的な像を捉えることである。調査結果の分析には、調査対象者が書いた作文を資料とする<sup>26</sup>。

### 3-2 調査の方法と分析の観点

調査対象者は埼玉大学学生82名(男子19名 女子63名)であり、年齢構成は18～22歳、出身地は関東を中心に全国にまたがっている。調査時期は1997年12月である。調査方法は、原風景について、幼少の頃からの記憶の中で「自分だけが持っている一枚の風景画」「自分の内部ことどもりつづける風景」<sup>27</sup>として思い浮かぶ風景を作文または絵と共に説明文を書いてもらった。なお、調査対象者は、事前に『場所との対話』<sup>28</sup>にある「記憶に残る場所」の実習として、「昔へ戻る旅」という作文を書く学習をした。

原風景の分析にあたり、先行研究を踏まえて〈建築的空間〉、〈自然〉、〈人間関係〉という3つの観点を設定し、「人が所有している空間」の具体的な像の特徴を捉えようと試みる。観点の定義は次のとおりである。

〈建築的空間〉:家等の建築物そのもの及び屋内空間(家具や調度品を含む)。庭、道などの屋外の建築的空間も含む。

〈自然〉:空、山、海、川、森林、木などの自然空間および、月の光、雨、雪などの自然現象。なお、田畑、道、庭などは〈建築的空間〉と〈自然〉の

両方の観点を含む。

<人間関係>: 主体(記述者)を取り巻く人間の行動や様子。ここでは人物が原風景の中に実体として登場しなくても、「外出してない」「一人で寂しい」という表現等、関係性による表現もこの範疇に含む。

### 3-3 原風景の「人が所有している空間」としての特徴

原風景として描かれた主体の年齢構成は、小学生(主に低・中学年)以下が82例中55例で、幼少の頃の風景を成長の軌跡を追うように長期にわたって描かれているものを含めると70例を占めた。これは原風景の多くは、幼少年時代から青年時代に至る期間とする岩田の研究結果と一致する<sup>29</sup>。原風景に描かれた場所は、過去に住んでいた、または現在住んでいる家、近隣が62例と、日常的な住環境が多くを占めた。原風景の登場人物は、本人だけのものは22例で、家族・親類34例、友達その他26例であった。

以下に3つの観点に見られる特徴を明らかにする。

#### 3-1-1 <建築的空間>

原風景で語られた場所は、家やその屋内空間である居間や台所、子ども部屋、階段、廊下、縁側の他、庭、蔵、納屋、また路地や学校の教室と多様であった。そこでは、<建築的空間>から受ける影響が多様であると同時に、主体が空間を多義的に規定していることが示されている。

高校の木造校舎は、そこでの生活や出来事と切り離されて語られている。先行研究でも指摘されているように<sup>30</sup>、主体は<建築的空間>の持つ陰のイメージから受けた影響が語られている。

「廊下は歩くたびにまるで鷲が鳴いているかのように、きゅっきゅつとなった。窓側は光が射して明るい、全体的に暗く、カビ臭い、ホコリ臭い臭いがした。冷たい風が入ってくる、冬の印象が強い。思い浮かべると、なんとなく心が落ちつく、心地よい感じを覚える。暗くて怖いという印象が無いわけではないが、自分が原点に立ち戻れる場所のように、とにかく好きな場所である。」

蔵は、居住空間になっても未知の場所として存在する。それは、子どもにとって蔵という<建築的空間>が構造的な魅力を持っていただけでなく、日常生活で使われていない空間が、主体にとって未知の空間としてあり続けたからである。人間と<建築的空間>が相互に影響し合うことによって、蔵という空間を規定している。

「18歳の時まで住んでいた家(今も家族が住んでいる)と少し離れたところにある蔵で、小さい頃よく遊びました。当時から、もう蔵としての役割を果たしてしまっていたので、自由気ままに遊んでいました。私が3歳か4歳の頃に新しい家を作ることになりました。古い家と同じ土地に建てるので、私達まじは蔵の中に引っ越して、そこで暮らしていました。そこにはいろいろなものがあるし風呂のことなどで少し不便でしたが、そこで暮らすのは楽しかったです。遊び方としては、かくれんぼなどの鬼ごっこでした。隠れ場所は事欠かず、2階にも梯子で上れたし、ある戸を開けて階段を上ると誰が使ったのか分からない不思議な部屋もあったし、隠れたり逃げたりする場所がたくさんありました。家の中と違う場所に行くのは結構冒険でした。」

<建築的空間>が本来の使用目的とは異なる空間として語られる場合もある。主体の心的構えによって<建築的空間>を規定しているといえよう。幼少の頃住んでいた家の階段で、一般的には階段として使用する空間が、心の「シェルター」として表現されている。これは、階段という場所で積み重ねられてきた行為や出来事によって生成された主体の心的な構えによって切り取られた空間である。

「(台所の)左に見える階段が好きで、いつも飲み物を持って本を読んでいた。なんだか悲しくもある場所。いろいろあったからなあ。ある意味シェルターだったかも知れない。心の。」

<建築的空間>は、空間が持つ機能的役割としてではなく、主体が心的構

えによって生成した意味空間の象徴として語られる。主体にとって平和な日常の象徴として父がテレビを見てくつろぐ居間があり、母親の居場所としての台所がある。そこに誕生を祝う象徴としてのこののぼりが存在している。

「僕が幼い頃、家の中庭にこののぼりを立てていて、それを見上げる自分の姿が原風景として浮かび上がってくる。父親は居間でテレビをみながら横になってくつろいでいる。母親は、朝ご飯の片付けをしているのか、台所にいる。祖父祖母は何をしているのか、僕の心のイメージには出てこない。そういう生活のサウンドが聞こえる中で、中庭に面した部屋の大きな窓から座ってこののぼりをみている自分がいるのである。そこには、平和な空気があり、それを感じ取っている自分がいるし、僕も一人こゝであったためか、寂しい感じもする。」

家族団らんの象徴としての茶の間。ここでは、志向的客観的広さに対する意識が薄れ、物や人間関係との関係性により生成された空間が現れており、主体が空間と融合している。

「私の家は、中学3年生の時増築を行いました。今でも記憶に残っているのは、1歳からずっと住んでいた古い家のことです。今では殆ど変わってしまって面影もないけれど、時々ふっと私の目の前に現れるそんな風景です。玄関を開けると目の前に階段があり、その奥の襖を開けると茶の間がある。狭いのにいっぱい物があって窮屈だったけど、一番のんびりできる場所で、みんなの声がいつももある私の大好きな部屋だった。」

また、住居の近代化によって失われつつある縁側、大黒柱、畳に対する記述では、そのものが与える影響の大きさが読みとれる。しかし、ここでは、それらは単なる物としての存在ではなく、営まれた家族の生活の中に組み込まれて意味を象徴し、一つの空間を生成している。

「私は、生まれ育った家を思い浮かべます。私の父もその家で育ちました。一部屋が大きくて、ふすまの仕切りをなくせば、姉妹3人で鬼ごっこもできたり、家の中でかくれんぼもできました。畳をかえた日のおひな祭り好きでした。縁側もありました。天気の良い日に布団をそこに干して、よくその上に寝転んで、母親にこしかれたのを覚えています。大黒柱がとてと太く、毎年、誕生日に、父親が子ども達の身長を印をつけていました。あたたかくて、包まれていたなという思いを抱く。」

主体が安心できた空間は家だけでなく家の脇の小道周辺という空間の場合もある。そこにはその空間の象徴として優しいおばあちゃんの家、友達の家と自分の家、空き地がある。

「幼稚園に入った頃に住んでいた小さな家のすぐ脇に細い小道がありました。車が1台通れるくらいのアスファルトの道路で、近隣の住宅の間をぬうように走っている道でした。そこは、僕と周辺の子供達の遊び場になっていました。毎日のように日が暮れるまで。子供の遊びは、きつと殆ど経験したと思います。その道の脇には、側溝があって、優しいおばあちゃんの家があって、大きな柿の木があって、草むらも空き地もあって、そして友達の家や自分の家があって、大きな道へつながっていました。あのころにちよつとの間戻ってみたいなって思います。いま忘れてしまった何かを取り戻せそうなきがします。」

この様に<建築的空間>の分析では空間と人間が相互に影響しており、<建築的空間>は一般的なものとしてその存在が記されているのではなく、主体が生成した意味空間の象徴として記され、同時に<自然>や<人間関係>も一元化している。つまり、これらの記述においては、空間が主体にとって主客二元的関係や志向的関係において存在するのではなく、空間における主体の在り方が語られることによって空間が生成しているといえる。そして、その空間を構成している心的構えは“Geborgenheit”として解釈することができる。

一方、テレビが孤独を象徴するものとして存在し、居間という壁で区切られた空間だけでは“Geborgenheit”を得ることは難しいことを示している。

「7才まで住んでいた宮崎の家の居間。まだ昼間。喘息で学校を休んで寝ている。両親は二人とも働きに出ていない。つきっぱなしの3チャンネル、枕の側に山積みされた

た7・8冊の本。一人でいると時々すごく不安になった。あの頃はまだ、おぼけや宇宙人が怖かった。その時の自分は、現在の自分の基になっていると思う。本を讀みしかなかったことが、教育学部の国語科に入学するほどの国語好きの基になり、また、一人ぼっちでいたから、他人との付き合いが下手になって、また、臆病な性格の基になった。」

### 3-3-2 <自然>

原風景には、恵まれた自然の中で育った学生が表現しただけでなく、身近な庭先の木やそこに来る昆虫、鳥、夕日や月明りなど、子どもの心に残る自然が多く描き出されており、雄大な自然だけでなく都市部の身近な環境にある自然においても、自然の持つ影響力の大きさを示している。

「家の庭、特に晴れた日の月の夜、庭には沢山の木があった。庭は木に囲まれた狭い空間だが、逆にそれが月の光を集めるのに適した空間になっていた。春の庭、朝、まだ暗いうちに窓から庭を見ると、まず驚く。枝に雪が積もっているように見えたのだが、実はそれお満期の桜だった。人に簡単に伝わらない感動、または、人に伝わらなくても自分だけにはわかれたいような気持ち。」

特に、木の描写では太い幹、大きな木と表現され、時間的なスパンの大きさによる感動や安心感が伝わってくる。

「私が小学校低学年の頃、まだはこの家はなく、一本の大きな木が立っていた。この木の周りは子どもの頃の遊び場だった。特に、夏になるとセミやカブトムシ、クワガタがやってくるので、近所の子どもとよく虫捕りをしたり、木登りをした。枝を折ってチャンバラなんかもやった。はこの家を建てるため木を切ることになった時、私は大泣きして親を困らせたそう。あの木にはとてもあたたかイメージを持っている。今から考えてみれば、そんなに巨木ではなかったかもしれないが、子どもの頃の私にはとても大きく見えたのだろう。あたたかだけでなく、強いという印象も残る。」

木は、自分と時を共にして成長をする。その空間は、<自然>から受ける影響だけでなく、木は人間化されて表現され、心的構えによって生成した空間となる。

「そこは一つの住宅街で、一本の大通り（バス通り）が通っていて、その通りに沿って桜並木が立っていた。小学生の時からその道を毎日通っていた。それは高校に入って電車通学を始めてからもずっと続いた。その桜並木は、四季の変化を、様々な姿で僕達に知らせてくれた。桜の花びらを踏んで歩いたことや、冬になって裸になった木を眺めていたことを鮮明に覚えている。その桜並木は、自分にとっては自分成長を見守ってくれている親のようであり、たぶん今でもその地域の人々を見守り続けているのだろうと思う。」

この様に<自然>を物として表現するのではなく、身体の一部のように感じている事例では、<自然>との関係の中に自己を置き、創作的思考により自己を発展させる空間を生成している。

「ずばり山と水田、そして雪。学校や家、その他の遊ぶ場所等においてもこの3つのキーワードが必ず入っている。物心ついた時から自分の周囲に必ずあったものなので、自分の本質的なものの一部である気さえる。人間に手や足があるのがふつうのように、自分の周囲に山と水田があり、冬になると雪が降るといのはごくごく当然のことなのだ。この様な風景は、自分がいるべき場所という印象さえる。偶然に育った環境は、今や私の中で必然なのである。」

「大学に入学するまで山形県の日本海に面した鶴岡市と言うところに住んでいた。私の家の窓からは海が見えた。私はつらかったり寂しかったりしたときにはいつも海を眺めにいっていた。けっしてきれいな海ではないが、広い海を見ると不思議と気持ちが落ち着いてきた。そして、また頑張ろうという気持ちになるのである。私の中で海のある風景は、心の一部、体の一部といつてよいだろう。海を思い出すことで、力が湧いてくるのである。あの海のように大きい人間になりたい、こんなことで負けてはいけない!」

<自然>は主体にとって常に見守り、安らぎを与えてくれる存在ではない。特に、幼少期の主体にとっては恐ろしいときもあれば、冒険心をそそられるときもある。しかし、それらの要素を全て包含した<自然>が主体の自己生

成という時間を共有したとき、その空間は、“Geborgenheit”の空間となる。

「家の裏山、幼稚園の頃から、虫を取ったり、走り回ったり、ずっとこの山で遊んでいた。山頂からさらに奥に遊べることもできるが、道が細く崖になっていて危ないので、余りいかない。たまに行くといく度にドキドキする。この奥の山道はとにかく暗く、夕方になると本当に危ない。逆に山頂まではとても明るく、山頂からは平地全体がとてもよく見え、遠くには海も見えてすがすがしい。現在はどうなっているかわからないが、あの明るく暖かい感じは変わらないだろう。この山道には、秘密の場所もあったし、自然からとても多くのことを学んだ。恐ろしい経験や楽しい経験など、小さい頃の生活そのものであった気がする。」

このことから、<自然>では2つの特徴を挙げることができる。第一に、<自然>そのものに強い影響力があり、主体が生成した意味空間に影響を与えている。第二に、その影響力の強さから<自然>が人間化され、自己の存在と強く結びついた象徴になっている。そして、この様に生成した空間は主体にとって決してよそよそしい空間ではなく、“Geborgenheit”のある空間として語られている。

### 3-3-3 <人間関係>

原風景に描かれる人間は、現在家族と暮らしているかどうかに関わらず家族が多かった。また、<人間関係>についての語りは、家族だけでなく友達との存在が自分の自己形成と関連づいている。

原風景では<人間関係>も主体が生成する空間に大きな影響を与える。例えば、塾の職員室という場所が建築的空間という存在とは別に、主体間の心的構えによって語られている。

「私が思い出すのは、中学の時に通っていた塾の事です。やっぱり一番好きなのは、1階の職員室。いつもそこは生徒と先生でにぎやかで、いつも笑いがあふれ、活気があり、つらいはずの勉強も楽しくできてしまう、そういう不思議なところでした。まるでおもちゃ箱みたいな。塾だから夜通う方が多かったはずなのに、窓からは陽があふれるように差し込み、あたたか感じ。」

この様に<人間関係>によって生成する空間は、主体間同士のかかわりが重要である。つまり、<自然>では主体は強い影響を一方的的に受ける場合があったが、<人間関係>ではその関係性が人間の空間の中でのありようを規定する。<人間関係>が<自然>と共に語られる場合、二つの相乗作用により自己生成空間としての意味が強調される。

「稲刈りをした後の田圃。そこは僕達にとって、最高のあそび場だった。サッカー、ゴルフ、ラグビー、相撲というように色々な遊びをした。そして、夕方、田圃に寝ころんで空を見上げて、一番星を探す。遊び終わって火照った体を涼しい風が冷ましていく。ぼくはこの時間が最も好きだった。そこに僕は安らぎを感じる。僕という個人の何分の一かは、確実にそこで形づくられたと思うから。そして、あの場所をいたことを誇りに思う。」

また、<人間関係>により生成する空間は、現前に対象となる人間が居るかどうかではなく、その場で積み重ねられた行為によって構築されている。

「ここは長野県佐久町の河原。ここにはお祖父ちゃんとお祖母ちゃんが住んでいて、小さい頃から正月、ゴールデンウィークと事あるごとに遊びに行っていた。いつも従兄弟も全員集まって必ず行くのがこの河原だった。行く度に水量が多いとか、少ないからまん中の砂州に行けるとか、風景が違って。季節によっても違った顔を見せる場所だった。私にとってはかけがえのない場所だと思う。私は初孫だったから、小さい頃は誰か大人の人につれて行ってもらっていた。そのうちに従兄弟が生まれて、1人増え、2人増え、従兄弟が犬を飼いはじめ、今では私（18）から6歳までの7人の子供と犬だけで行くことが多くなった。童謡「せいぐらべ」にでて来る傷だらけの柱のような場所なのだ。あそこには私達の成長の軌跡みたいなものが詰まっている。」

<人間関係>が家庭や学校という既定の集団とは異なり新たな関係が構築される時、身近な<自然>が関係性の発生装置として有効に働く。草によ

って出来上がった基地は、それを創り使うプロセスの中で<建築的空間><自然><人間関係>が相互に関係し合い、二人の特別な空間が生成する。

「部分7・8歳の頃、家の近くに大きな沼があり、そこには1mを越すサトウキビのような雑草の生えた荒地があった。後ろに倒れても草のクッションでゆっくり倒れるという状態であった。これを教えてくれたのが、こちらにきて初めての友達であったが、彼はその荒地での色々な遊び方を教えてくれたのだ。特に好きだったのは、草の上をころころ転がって、いわゆる基地というものを造ることであった。1m×3m位の基地を作ってはそこにお菓子を持って行ったり、ねころがって遊んだのを覚えている。」

このことから<人間関係>の特徴として、人間の空間の中での在りようを決めるのは、主体間同士の関係性の生成であるといえよう。そして、その関係性は<建築的空間>や<自然>のもつ影響力の助けを借りてより密接な関係性を結ぶ。

### 3-4 まとめ

原風景として語られた空間では、<建築的空間>、<自然>、<人間関係>のいずれもが主体に影響を与え、またそれにより主体が空間を規定するという相互浸透の関係を捉えることができた。また、この様にして生成した空間では人間と空間が一元化しており、人間が空間にはめ込まれ、また包まれるという空間の中での人間のあり方が示された。この空間と主体との関係は“Geborgenheit”によって生成した「内部空間」が成立していることを示すと共に、眼前に存在する明らかな客体であっても、人間は自己の持つ空間性によって主客の分裂を緩和し、また目的合理性という志向の関係も緩和していることを示しており、原風景がボルノウの「人間が所有している空間」の具体的な像を捉える一つの方法として有効であることが確認できた。

### 4 おわりに

本稿では、ボルノウの空間論から得た住環境教育の課題に取り組むために、ボルノウの「人が所有している空間」という概念を具体的な像として捉えることができた。住環境教育では、<建築的空間>、<自然>、<人間関係>として個別に切り取った観点からのアプローチではなく、相互に関係しあって生成している「人が所有している空間」に対する意識に着目することにより、住むことの本質をふまえた空間生成への取組みが求められている。そのことのためにも、「内部空間」が「外部空間」へ働きかける原動力となるという視点にたった第二の教育的課題に対する研究を進める必要がある。

#### [注]

- 1 文献1) 参照。
- 2 ボルノウは、空間に対する哲学的人間学的な考察自体が極めて教育的であると述べている。文献2) pp. 123~127。
- 3 文献3) 参照。
- 4 文献4) 参照。
- 5 文献1) pp.291~292 参照。尚、ボルノウは文献1)では明確に教育的意義を述べていないが、文献5)では、空間性のもつ教育的効果を明確にしている。p.334 参照。
- 6 文献1) p.189 参照。
- 7 文献1) p.259 参照。
- 8 文献1) p.278 参照。
- 9 “Geborgenheit”は動詞“Bergen”（かくまう、安全に保管する）の過去分詞“geborgen-”、さらに名詞“Berg”（山）や“Burg”（城）と関連を持つ語である。文献1) p.314 参照。また、須田によればこの語の意味する概念は日本語にはないため、訳語として「守護（性）」「庇護」「被包感」「安らぎ」「安心感」など、多義にわたるといふ。文献6) p.270 参照。具体例を挙げれば、“Geborgenheit”は文献6)では論議に使われていることを考慮して「被護性」と訳され、文献1)では本文の中で前後関係を持って用いられていることを考慮して、あえて「やすらぎ」と訳されている。
- 10 文献1) p.267 参照。
- 11 文献1) p.286 参照。
- 12 文献1) p.288 参照。
- 13 ボルノウは、初めに文献7)の中で「悲嘆や憂慮の生抑圧的作用およびそれとは反対に幸福な状態の開示の力とそこで可能にされた諸経験」として、次に文献6)の中で「生

の主要な基礎としての希望」として、自己を支えている力としての“Geborgenheit”を確認づけている。さらに、文献8)では「庇護性の感情と子どものその世界に対する信頼 無くしては教育が成功し得ないところの必然かつ不可欠な条件として取り上げた。文献9) 参照。

- 14 文献5) pp.334~335 参照。
- 15 原風景研究の動向については、文献10)参照。
- 16 文献11) p.502 参照。
- 17 文献12) 参照。
- 18 文献13)、14) 参照。
- 19 文献15)、16) 参照。
- 20 文献14) pp.23~24 参照。
- 21 文献17)、18) 参照。
- 22 文献19) 参照。
- 23 文献20)、21) 参照。
- 24 文献22) 参照。
- 25 呉も原風景の先行研究に見られる特徴として、原風景の視点が一元的であること、原風景が自己との出会いをもたらし自己実現の原動力になることを指摘している。文献10) pp.29~35 参照。
- 26 このようなコンテクストの中で語られる主観的事実を基に論じた論文には、口述記録を基に論じた木下勇（文献23）や森永（文献24）らの研究があり、主観的要因により研究することの妥当性を明らかにしている。
- 27 文献14) pp.32~33 参照。
- 28 文献25) pp.32~33 参照。
- 29 文献14) p.11 参照。
- 30 文献16) p.122、17) p.115、19) p.17 参照。

#### 【参考文献】

- 1) O.F.ボルノウ著、大塚恵一他訳：人間と空間、せりか書房、1978年
- 2) O.F.ボルノウ著、岡本英明訳：教育学における人間学的見方、玉川大学出版部、1977年
- 3) 小澤紀美子、他6名：人工的環境（住宅・建築・都市）から学ぶ環境教育に関する研究、住宅総合研究所研究年報、No23、pp.187~196、1996年
- 4) 延藤安弘：「まち育て」を育て、東京大学出版会、2001年
- 5) O.F.ボルノウ著、石川道夫訳：一般教育学の統合の核としての教育人間学、A.フリットナー・H.シュョイアール編 教育学的に見ること考えることへの入門 所収、玉川大学出版部、1994年
- 6) O.F.ボルノウ著、須田秀幸訳：実存主義克服の問題 新しい被護性、未来社、1969年
- 7) O.F.ボルノウ著、藤縄千州訳：気分の本質、筑摩書房、200、1973年
- 8) O.F.ボルノウ著、森昭・岡田渥美訳：教育を支えるもの、黎明書房、1980年
- 9) 後藤さゆり：ボルノウ教育学に基づく住環境教育に関する基礎研究—開口家政学の批判的検討から—、東京学芸大学大学院連合学校教育研究科 学校教育学研究論集、第4号、pp.61~74、2001年
- 10) 吳宣児：語りから見る原風景 心理学からのアプローチ、萌文社、2001年
- 11) 建築大辞典 第2版、朝国社、1993年
- 12) 奥野健男：文学における原風景、集英社、1972年
- 13) 岩田慶治：原風景の構図、子ども文化の原像—文化人類学的視点から 所収、日本放送出版協会、p.23~36、1985年
- 14) 岩田慶治：日本人の原風景、淡交社、1992年
- 15) 関根康正：原風景試論—原風景と生活空間の創造に関する一考察—、季刊 人類学、13-1、pp.164~193、1982年
- 16) 関根康正：他者と対面する住まい、佐藤信司編 住まいに生きる 所収、学芸出版社、pp.229~248、1998年
- 17) 仙田満：原風景による遊び空間の特性に関する研究—大人の記憶している遊び空間の調査研究—、日本建築学会計画系論文報告集、第322号、pp.108~117、1982年12月
- 18) 仙田満：子どもと住まい 50人の建築家の原風景（上・下）、住まいの図書館出版局、1990年
- 19) 延藤安弘：住志向に関わる原風景—ふるさとの思い出からみた住まい計画、ライフスタイルからみた住居・環境計画に関する調査研究 所収、住生活研究会、pp.1~26、1987年
- 20) 寺本深：子ども世界の原風景、黎明書房、1990年
- 21) 寺本深：子どもの知覚環境、地人書房、1994年
- 22) 野中健一：大学生の原風景に見る生活環境の中の自然、環境教育、Vol.3 No.1、pp.2~18、1993年
- 23) 木下勇：三世代への開き取りによる農村的自然の教育的機能とその変容—児童の遊びを通してみた農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究 その2、日本建築学会計画系論文報告集、第450号、pp.83~92、1993年8月
- 24) 森永良丙、延藤安弘、横山俊祐：「状況づくり」の視点から見た参加型集住体計画の研究—Mポートの基本計画・設計プロセスの考察—、日本建築学会計画系論文報告集、第478号、pp.69~78、1995年12月
- 25) ファーブスタインJ、カントロウィッツ著、高橋麻志訳：場所との対話 人間の空間を理解するための42章、TOTO出版、1991年

(2001年10月10日原稿受理、2001年12月26日採用決定)